

母のふところ

〔聖書〕詩編 22 編 10～12 節

わたしを母の胎から取り出し／その乳房にゆだねてくださったのはあなたです。母がわたしをみごもったときから／わたしはあなたにすがってきました。母の胎にあるときから、あなたはわたしの神。わたしを遠く離れないでください／苦難が近づき、助けてくれる者はいないのです。

〔序〕典型的な教育ママ

今日は母の日です。A 兄がお母さんの思い出を証して下さいました。私も母の思い出を語らせていただくことにします。母は三人姉妹の長女で、北海道の旭川で生まれ、釧路で育ちました。小学校を卒業すると、当時釧路には未だ女学校が無かったので、12 才でひとり旭川に出て女学校に入り、寄宿舎暮らしをしました。4 年で女学校を修了して奈良の女子高等師範に進み、20 才で卒業、母校の教師になりました。

しかし3年間で教職を捨て、東京に出て父と結婚しました。そして教育への情熱を私たち3人の息子に注ぎました。兄を東大のそば近い小学校に入れ、後に東大に入学させました。私を聖学院付属幼稚園に入れると、やがて園長のヤング先生にお願いして、毎週一回先生のお宅に通って英語を習わせました。また豊島師範の付属小学校に入りますと、やがて師範の教授を家庭教師として迎え、週一回かしこまって勉強をみて頂きました。小さい時からピアノを習わせ、自由学園の音感教育に通わせました。兄はずっと続けましたが私は直ぐにやめたようです。絵の先生に来ていただきました。神田のYMCAまで水泳を習いに行かされました。それで小学校5年夏の海の合宿で2キロ遠泳を達成して、ただ一人2級になりました。

戦後の混乱期に私が目白ヶ丘教会に通い始め、クリスチャンになりましたら、母も礼拝に出席するようになりました。私が神学校に入って卒業する年の10月に、私の親友のお母さんを誘って一緒に信仰告白をし、バプテスマを受けてクリスチャンになりました。なかなか決心のつかないでいた母が、何故あの時バプテスマを受けたかと申しますと、息子の享がいよいよ来春神学校を卒業して牧師になる。人さまに説教をして信仰をおすすめするのに、自分の親も導ききらないのであれば面目が立たないのではないかと、案じたからのようでした。

〔1〕用意されていた風呂敷包み

さて動機が何であれ、クリスチャンになりましてからの母は、変っていきました。私の牧師は「君のお母さんが信仰を持ちさえしたら——」とよくおっしゃってましたが、その言葉通りに、人柄がみるみる変りました。それを目の当たりにして、私は信仰を持つことの大切さを、しみじみ思い知らされたものです。

晩年は父母共に札幌の牧師館で私たちと一緒に過しましたが、孫の一人がこんな作文を書

いています。「毎朝4時頃になると、下から不気味な物音が聞こえます。まるで泥棒でもいるかのように——。実は77才の祖母なのである。背筋をピンとはり、顔つやもよく、キビキビと動き廻るので、皆さんはきっと10才は若くみることだろう。

先ずカーテンをあける。冷たい水で顔を洗って、さあ、掃除！ 棚の隅のほこりといい、あらゆるゴミを取り除かなくては気がすまない。台所もたんねんに水ぶき。なんせ祖母にとっては、トイレまでが一つの部屋と考えられているのだから、恐れいってしまう。『もっとゆっくりしたらいいのに——』と私はよく言う。しかし私たちが起きる前にやってしまいたいと、祖母はきまって言う。

次に外へ出て、庭をはいたり、花壇の手入れをしたり、ゴミを片付ける。そしてさらに洗濯——。もう目が回ってしまう。これらを2時間でやりとげると、髪を結った後にお習字の練習までやり始めた。去年10月13日、祖父が亡くなってからもう1年になろうとしている。しかし祖母は少しも変わらず毎朝働いている。祖母がいてくれてよかったと、私は感謝の気持ちでいっぱいである」。

この作文の終わりに先生の評が記されていました。「おばあちゃんの一途な生き方に心を打たれますね。加藤さんの感謝の気持ちがよく伝わってきます」。

母が台所をしますと、料理をしながら一方では台所が片付けられ、磨きたてられ、食事の準備が完了した時には、流しもきれいになっています。それは見事という外ありません。一方、喜美子とはいいまして、9人家族の食事が終わって流しが食器の山になっていても、そのまま静かに本を読んでいた方です。「先ず片付けてさっぱりした気持ちで本を読んだら」とつい言ってしまう母に、「汚くても別に死にはしませんわ」と答えるお嫁さん。

幸いにも母は、働き者のマルタを優しくたしなめたイエスさまのお言葉をよく知っていました。「マルタよ、マルタよ。あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない」(ルカ10:41~42)。そしてイエスさまの言葉に聞き入ろうとする喜美子の信仰には、一目も二目もおいていました。ですから我が家では、マルタとマリアの二人が折り合って長らく暮せたのでした。多くの方が喜美子と母とが実の親子だと思ふほど、二人は似てきました。

母は83才の12月15日に脳内出血で倒れて入院し、意識が戻らぬまま翌年5月9日に神さまに召されました。医者から長くはないと言われ、いよいよ葬式かと覚悟を決め、母の部屋に入り、たんすの引き出しを開けていきますと、不似合いな風呂敷包みを見つけました。開けてみますと、自分の葬式用に備えたものでした。連絡をする方のリストとか、「ハツコの記録」と記したノート。そこには自分の略歴、心の支えにしてきた聖書の言葉、愛唱賛美歌、バプテスマを受けた時の写真も貼ってありました。ノートの扉には、私たち親子を導いて下さった牧師から、母が東京を引き揚げて札幌に来る時に頂いたカードも貼ってありました。

「私はすべてを失ったが、それらのものを糞土のように思っている」(フィリピ3:8)。住みなれた広い家売り、狭い牧師館に来て一緒に暮すのは、母にとり「すべてを失う」ことだったと思います。いろいろなことに恵まれていた母にこの言葉を贈ってくださった牧師はさすがでした。母はそのカードの下の余白に、次の聖句を書きとめていました。「私は裸で母の胎を出た。また裸でかしこに帰ろう。主が与え、主が取られたのだ。主のみ名はほむべきかな」(ヨブ1:21)。

あれほどよく動いた手足は年とともに衰えをみせ、朝起きて身支度をするだけで2時間もかかってしまう体になりました。孫娘を驚嘆させた面影は、全く失われてしまいました。豊かに持ち合わせていたものを次々と失っていくことは、どんなに淋しく辛いことでしょうか。しかしそれを神さまのお計らいとして、素直に喜んで受けいれようというのが、母が到達していった信仰の心根だったのでしょう。

今振り返りましても、「早く死んだほうがまだ」などと口走ったりするせんない愚痴は全く聞いたことがありません。その潔さは見事でした。「神さま、もう十分に生きました。どうかなるべく苦しまず、周りの者にも迷惑をかけないで、御許にお召し下さいませ」と、朝に昼に夜にお捧げして毎日を過してきたのでしょう。箆笥の引き出しに収められていた風呂敷包みから、母の祈りが聞こえてくる思いがしました。

〔2〕母性に惹かれる理由

私たちの体内には実に沢山の臓器があり、その働きによって自分の命が養われ、守られています。「しかしただ一つ、自分の命ではなく、他の命を養い育てる臓器がある——それは女性にのみ備えられている子宮です」という言葉を読みました。しかも子宮は命を選び好みしないで受け容れ、胎内で抱き育てます。

イエスさまは山上の説教の初めに「憐れみ深い人々は幸いである」とおっしゃいました。この憐れみはヘブル語では子宮・胎の複数形ラハミームという語が使われています。ユダヤ人は憐れみ深い人を「子宮を幾つも持っている人」と表現したのでした。母の胎は命を宿す時に入学試験をしません。将来どんな人になるか全く見当がつかないまま、無条件で受け入れ、10ヶ月間じっと抱き続け、自分の血と肉とそして命までも分け与えるのです。まさに慈悲そのものを表す素晴らしい臓器なのですね。

私たちが母性に惹かれるのは、憐れみそのものの働きをする母の胎内で育てられ、その憐れみを全身で知っているからではないのでしょうか。女性の皆さんはどのように素晴らしい臓器を体内に与えられえていることを、十分に自覚して、授かった我が子を胸に抱いて大切に育てていただきたいものです。

多くの教育専門家は「情緒の安定した子どもたちに、健やかな人格形成がみられる」と言っています。そしてその情緒の安定は、安らかな心を持つ母親のふとこで養われていくそうです。神さまは、私たちの魂をしずめ、安定した情緒の持ち主になるように、母のふところを備えてくださったのだと私は信じています。

今日の聖書をご覧ください。「わたしを母の胎から取り出し、その乳房にゆだねてくださったのはあなたです。母がわたしをみごもったときから、わたしはあなたにすがってきました。母の胎にあるときから、あなたはわたしの神。わたしを遠く離れないでください。苦難が近づき、助けてくれる者はいないのです」(詩編 22 : 9~10)。

これは人生の厳しい苦難のさなかで作られた歌です。誰も助けてくれる人がいない、一人ぼっちという孤立感の中で、でも神さまは私を先ず、母の胎内に置いて育て、世に生まれ出ると、母の胸の中で保護し、乳房で養い育てて下さった。このように母のふところを備えて私を保護して下さい神さまが、私をお見捨てになるはずはない、という信頼感が歌われています。

イエスさまと弟子たちが、ガリラヤ湖を舟で向う岸に渡ろうとした時に、突然激しい嵐が起り、舟が波にのまれそうになりました。弟子たちは「主よ、助けてください。おぼれそうです」と叫びました。「なぜ怖がるのか。信仰の薄い者たちよ」イエスさまは、ただちに嵐をしずめてしまわれました (マタイ 8 : 23~27)。

人生の嵐のただ中で魂の平安を保つには、神さまに全幅の信頼を寄せるという信仰が必要だとおっしゃったのです。そして神さまはそのような信仰の揺りかごとして、母のふところを備えて下さったというのが、聖書の信仰です。

[結] 母親の役割

フランスの作家ボヴェーは、こう言っています。「神さまに全幅の信頼を寄せることを我が子に与えることが出来た母親は、自分の人生の役割を全うしています」。どのお母さん方のふところも、我が子に平安を与え、情緒の安定した人格が養われていく揺りかごになりますように、心からお祈りいたします。

河野進がこのように歌っています。

「母がいるから、家に帰りたい
もし 天国に母がいなかったら 門の外に いつまでも待っていよう
長い間 待ってくれたのだから」

どのお母さんも、先ずご自分が天国に入り、天国でも我が子を迎える母になっていただきたいものです。